

ナナメの関係

2021・10・13 重枝 一郎

生まれ育った地域や家庭などの環境によって、生徒の将来の可能性が大きく左右される状況はあってはならないという考えが、私たちの学校教育の根底にある。それでも時に生徒たちは、学校中でまわりとの比較等で自信を失うこともある。そのため学校は、誰もが自分の考えを言えたり、積極的に行動したりできる心理的安全が確保された環境であることが大切になる。そういう学びの環境の中で、生徒たちがチャレンジできるようになることが私たちの願いになる。

私は「異質とつながる力」がとても重要だと常々言っている。同質の中で過ごしていると、固定的な考えにとらわれがちになっていく。だから本校では、先生方が生徒に対して、学校以外の多様な人たちと関わる機会を積極的に設けていると思っている（様々な分野の講師を招聘している）。学校以外の人々の考えや経験を聞いたり、対話したりすることで、生徒は気付きを得たり、経験を共有したりして、様々な価値観に出会って学んでいると思う。

さて、多様な人たちが生徒に関わるとはどういったことだろうか。

生徒は、保護者や教師という「タテの関係」人たちや同世代の友だちという「ヨコの関係」人たちと多く時間を過ごす。特に中高年代の生徒たちは「タテの関係」人には心を閉ざしやすく、「ヨコの関係」の人には同調圧力で悩みやすいという特性がある。

そこで重要なのは「タテ」でも「ヨコ」でもない「ナナメの関係」の人である。

「タテ」でも「ヨコ」でもない第三者が関わることで生徒は別の視点をもてるようになる。そのきっかけで生徒は、自分のもっているフレームを広げることになる。特に今の生徒たちは、良くも悪くも同質のコミュニティーの中にずっといて、他のことが見えにくくなっていると思う。なおさら第三者との「ナナメの関係」のかかわりが必要だと思う。

では、この「ナナメの関係」をどうつくっていくか。

私自身の経験でも、小学生の頃、地域のソフトボールチームに所属していて、そのチーム監督はボランティアの地域のおっちゃんであった。そのおっちゃんとの対話で私はいろんなソーシャルスキルを学んだように思う。あいさつ。きちんとあやまる。相手の立場を尊重する等。また、自分より少し年上の先輩とかからも身近なロールモデルとして何か影響を受けていたと思う。当時の私は、「タテ」も「ヨコ」もなかなか手のかかる存在だったような気がする。でも「ナナメ」との関わりは、振り返ると、それこそいろんなことに気づくきっかけになっていたと思う。

実は、年齢が近いと「ナナメの関係」がつくりやすいということは想像しやすいと思う。そう考えると、今の高校生には少し先を行く大学生は絶好の「ナナメの関係」といえる。利害関係がある保護者・教師ではなく、また、同じ視点になりがちな友だちでもない、少し年上の先輩になる大学生や学校以外の外部講師の方から刺激を受けることで、生徒たちを動機づけることができる。

今、私は「高大連携」を積極的に進めたいと思っている。いろいろな取り組み方を先生方からも知恵や発想をもらいながら進めていきたい。大学の方とも下準備的にすでに5回会議をしている（この会議は下準備なので私と久家教頭が参加している。大学短大からは学長、副学長と事務方も参加してこれまでのこと、これからのことを明るくポジティブに話している）。学習支援やキャリア教育だけの成果にとらわれるのではなく、私は、「ナナメの関係」ができるだけでも大きな意義があると思う。ちなみに今授業見学に来ている大学生に、生徒と対話してもらって構わないと話している。